

「スロー社会と地域政策」概要と “スロー”を巡る様々な動きについて

1. はじめに

10月28日、松山市において、県内の自治体、主要企業等関係者出席のもと、第12回政策研究セミナーを開催した。講師には、(株)三井物産戦略研究所 国土・地域振興室長で、「スロータウン連盟」副会長の園田正彦氏をお招きし、「スロー社会と地域政策」をテーマに講演をいただいた。

また、この講演を契機に、昨今注目を集めているこの「スロータウン」や「スローライフ」、「スロー社会」をはじめとする「スロー〇〇」という様々な言い方、あるいは主張について小考察を行った。

2. 「スロー社会と地域政策」

(講師：園田正彦氏)講演の概要

(1)「ニューふぁーむ21」でのまちおこし

昨年11月に、日本全国の54の市町村の首長さんと(株)三井物産戦略研究所で「スロー」というキーワードのもと、「スロータウン連盟」という連盟を設立した。なぜ、三井物産という商社がこういうことをやっているかという、バブルがもうそろそろ終わりかなという1991年に、商社流のまちおこしというものをやらせてもらえないかという話が農水省からあった。その要請に応じて、三井物産内にひとつセクションを作ろうということになった。そこで、地域おこしというのは農業と関係がある、農業が一番近い部はということで、自分のいた肥料部の中でやろうということになった。チームをつくり、「ニューふぁーむ21」というニックネームを付け、町おこしを始めた。

具体的には、市町村とコンサルタント契約を締結して、商社のノウハウ、民間の色々なアイデアを提供。PLAN DO SEEで事業を立ちあげ、うまく成功するまで

フォローアップしていく体制のコンサルタントを始めた。現在では、全国で75ほどの市町村が、コンサルタント契約を締結し、いろんな事業をやっている。

我々がコンサルタントをしていて一番感じることもある。地域づくりのコンサルタントというと、地域の事情に詳しい、地域政策に詳しい人がコンサルタントとして優秀であると思われる。しかし、この仕事をしている我々に一番必要なものは何かというと、地域に詳しいことではなく、都会にどれだけ顔があるかが勝負だということ。地方で一番弱いのは、都市側への顔であり、その顔とは、都市側の中小企業のオーナーをどれだけ知っているかということである。

そうした地域おこしの仕事をしていて感じるのは、地域も困っているが、都市側も頭を打ってしまって、困っているということ。例えば、米なら、日本中が全部コシヒカリというふうには、特徴がなくなっている。効率、利便性というのか、大量生産の中で、皆がほとんど同じものを取り扱うようになってしまって、特徴がない。我々は、そうした都市側の中小企業のオーナーなどの声もよく知っているので、地域と都市側とを色々な手法で結びつけ、いっしょに新しい事業を立ち上げてきた。その結果、事業そのものはうまくいっている。

(2) 逆転の言葉“スロー”との出会い

ただ、それによって、町全体が活性化したかといえ、不十分で、反対に都会の方、東京なら東京に、人も資本もどんどん加速度的に集中している。これがなかなか止まらない。

社会のものの考え方として、大きいものもいいことだとか、効率・利便性がいいことだとか、集中させる方がいいことだとかいう「スピードの社会」、スピードが“善”であると思っている社会がある。そうではなく、

「スローの社会」、もう少しじっくりと手間隙をかけて、少し不便でもいいんじゃないかというような社会も1つ作り上げて、今の社会を少し変えていくというようなことをやらないと、いくらがんばっても、都市に集中していく傾向は止まらない。

そういうことで色々考えていたときに、「スロー」という言葉に巡りあった。ふつう「スロー」というと、ゆっくりしているとか、ぐずぐずとか、のんびりしているとかというような意味であるが、これが、2つの言葉がくっついて、「スローフード」とか「スローライフ」とかいうことになる、大変心地のいい言葉に変わる。これはひょっとすると逆転の言葉だなと思った。「スピードの社会」に対して「スローな社会」というのも面白いと考えた。

(3) スロータウン連盟の設立と基本理念

その後、自分はイタリアの「スローフード協会」にも行ったが、これこそ日本でやるべき運動じゃないかと感じた。日本人というのは、八百万の神で、どんな神様でもいい、何でも信じてしまう。いろんな文化を受け入れて、何でも日本流にアレンジしてしまうというすごい才能がある。今、アメリカの文化を受けて、スピードの社会をいっているが、ひょっとすると、スピードの社会とスローの社会の共存ができる社会、懐の深い、幅の広い社会が、日本人ならできるかもしれない。それで「スロータウン構想」というのを立ちあげようということになった。

日本社会の将来の姿としては、2つの社会が共存する社会の構築が望ましい。1つはスピードの社会、もう1つはスローの社会ということ。スピードの社会は、時計に刻まれる世界共通の時間軸のもと、効率、利便性を重視し、新しいものを追求する社会。後者は、自然のリズムなど多様な時間軸を認め、万事手間隙をかけて物事を深く追求し、保存・再生に重点を置くスローな社会。この2つの社会が、お互い認め合い、尊重し合い、競い合いながら共存する社会。こういう社会を目指しているということで、このスロータウン連盟ができた。

(4) 保存・再生・循環活動

今の社会は、スピードの社会の方に傾いているので、それをスローの方に戻していこうということである。

ところが、それだけでなく問題なのは、本来、不変であるはずのもの、毎日の生活、営みの中で不変なものがあるはずだが、それが、変化しているということである。スロータウン連盟を作る時に、集まった13の市町村の首長^(注1)とともに研究会を作り、事業内容として、そうした不変なものをリストアップし、「保存・再生・循環活動」として11の項目をあげて取り組んでいる。

こうした活動に、賛同者もたくさん出てきており、これからもっと大きなうねりにしていきたいと思っている。面白いと考えていただけるなら、個人も入会できるよになっているので、参加していただき、理念を共有して、日本の社会を少し変えていくということをやっていききたい。若い方もそうだが、より肌で感じておられるのは、多分、中高年の方だと思う。そうした中高年の方に、もう一度こういうものを復活させていく原動力になっていただきたい。

皆さんも、これからのまちづくりのメニューの中に、必ずこういう保存、再生、循環活動というような項目も、入れていただいて、もう一度こういう循環をしていただければと思う。

3. “スロー”を巡る一連の動きについての小考察

(1) 様々な“スロー”

以上が、「スロータウン」構想を中心としたセミナー概要であるが、この“スロー”をひとつのキーワードとしてしてみると、昨今、様々な分野、領域で様々な提唱がなされており、ざっとみただけでも、以下のように多岐にわたっている。

○社会・生活分野

・食	「スローフード」
・住	「スローデザイン」
・衣	「スローファッション」
・都市	「スローシティ」

○文化・芸術分野

・音楽	「スローミュージック」
・思想	「スローライフ」

○スポーツ・レジャー分野

- ・スポーツ 「スロースポーツ」
- ・観光・旅行 「スローツーリズム」

○産業分野

- ・交通・運輸 「スロートラフィック」
- ・全般 「スローインダストリー」

この中で、比較的その定義、主張が明確と思われる「スローフード」と「スロースポーツ」について、紹介する。

(2)「スローフード」

「スローフード」という言葉の由来は、15年程前、イタリアのローマにマクドナルドの1号店が誕生し、マスコミで騒がれていたところにさかのぼる。ファーストフードの脅威という問題をきっかけにして、「スローフード」ということがいわれるようになり、1986年に北イタリアのブラという小さな村に「スローフード協会」が発足する。現在では、世界38カ国、132の都市にあわせて約6万人の会員をもつ一大組織にまでなっている。

このスローフード協会は、NPO(非営利団体)で、いわば食文化のボランティア団体。スローフードの「スロー」とは、単に時間的な遅い速いの次元ではなく、もう一度「食」というものをじっくり見つめ直してみてもどうか、という提案である。それによって、素材や料理について考えたり、食事を共にする人との会話を楽しみ、また、そうした生活そのものを大切にしようという考えのうえに成り立った人生哲学的なものである。

その具体的な内容は、次の3つである。

スローフード運動

- ①消えつつある伝統的な食材や料理、質の良い食品を守ること。
- ②質の良い食材を提供する小生産者を守ること。
- ③子供たちを含めた消費者全体に、味の教育を進めていくこと。

(3)「スロースポーツ」

これは、スポーツのファーストフード化といったものに対抗する形での「スロースポーツ」というものを提唱し、スポーツの楽しみ方を見直そうという動きである⁽¹⁾⁽²⁾。ここでいうスポーツのファーストフード化とは、オリンピック種目となっているような競技スポーツに代表されるように、世界各国が同じルール、たくさんの競技人口のもとで、メディアを強く意識し、見る側を飽きさせないよう、スピードアップしたゲームで、激しく競い合う、といったものである。

これに対するスロースポーツとは、スローフードが地場産の食材や伝統的な調理法にこだわるように、その土地の自然・風土、文化によって誕生し、その土地に暮らす人々によって育まれてきたもので、地域との密着性が強い。例えば、イギリスのクリケット、バリ島の水牛レース、中国の龍船、我が国での流鏝馬、凧合戦、相撲といった地域・民族の特有のもの、もっと一般的なものでは、カヌー、カヤック、フィッシングといったものがある。

こうしたスポーツでは、使用する道具や施設なども自分たちの手によって用意したり、あるいは自然そのものが競技場であったり、試合も時間制限がないといったものが少なくない。勝敗には必ずしもこだわらず、時間をかけて準備、プレイし、自然にもやさしいといった特徴があげられる。

4. 総括

こうした様々な「スロー〇〇」という言い方は、健康志向、環境志向、自己実現願望などと相俟って、「エコ」「エコロジー」「ナチュラル」「サステイナブル」といった用語と組合せて、あるいは同義的に使われている場合も多い。

また、地方行政とも関連の深いところでは、「スロータウン連盟」以外にも、この11月に、「NPO スローライフ・ジャパン」(川島正英 理事長)が発足している。広がってきた「スロー」の考え方でまちづくりを見直し、まちの活性化をはかろうとの設立趣旨である。こうした一連の動きには、平成の大合併により、地方自治体

のあり方、将来の姿に大きな変化の波が押し寄せる中で、「スロー」「スローライフ」をキーワードとしたまちづくりに、21世紀の目標ないし手法を求めようとする自治体の姿が現れている。

これらの動きを総括してみると、これまでのスピード社会に対抗するアンチテーゼ、パラダイム転換的なもの、その中間的なもの、地域活性化方策として応用しようとする動き、ライフスタイルとしての提案など様々である。

ただ、岩手県が3年前に行った「がんばらない宣言」で県議会から異論がでて物議を醸すことになったように、人によって捉え方が当然異なるので、例えば「あなたはスローライフでいいですね」などと言われても、現状では、むしろ反発される場合も多いのではないかと思われる。

“スロー”という言葉は、包括的で、ほかのことばと組み合わせると感じがいいということから、ここまで広まってきているともいえるが、あいまいに使われて誤解が生ずるということになっても残念である。混乱が生ずる前に、何かいい、ほかの日本語での表現が登場することにも期待したい。

これを契機に、地域政策としての、あるいは思想そのものとしての“スロー”について、今後も注目し、研究を深めていきたい。

なお、冒頭で紹介した第12回政策研究セミナー「スロー社会と地域政策」の内容詳細については、当センターより別途記録集を発刊しているので、そちらの方も、ぜひご参照願いたい。

(当センター 研究員 高橋清幸)

(注)1 愛媛県下では、三瓶町が設立当初からのメンバーに加わっており、現在、同町長が連盟の副会長に名を連ねている。

(注)2 日本学術振興会特別研究員(スポーツ人類学専攻) 田里千代氏など